

第 79 回山口西田讀書會（2015 年 6 月 20 日）

前回（78 回、2015 年 6 月 13 日実施分）の Protokol

出席者（敬称略、順不同）：佐野、深野、福田、奈原、千葉、桑原、尾崎、杉山、植田、萬納寺、山口、藤村、有江、岡田、岡部（15 人）＋県立大より 8 人見学

●第一部 Protokol 報告（岡部）

【純粹經驗の概念が含む矛盾、あるいは多義性】

純粹經驗は多義的であり、要素と段階をもった複合的な概念であるという理解があることを共有した。

禪の修行が基礎にある上田（閑照）説の 3 段階説では、孫の運動会で我を忘れて応援することは第 2 の段階「意識状態」であるとされているが、おなじ禪者である讀書会の深野住職は「孫の運動会でいっしょに走りだすくらいでなければ不十分」との感想を述べられており、禪者によっても意見が分かれる。

小坂（国継）説でも純粹經驗を 3 つに分けている。「『善の研究』のなかで展開されている西田の純粹經驗の思想に矛盾がみられる」「すくなくとも多義的な性格を持っていることは否定できない」「種々の要素と段階をもった複合的な概念である」との理解が紹介された。

- 1 段階 初生児の意識のような感覚、知覚の段階
- 2 段階 反省的思惟の段階
意識の分化発展で厳密な意味での純粹經驗ではないが不可欠：広義
統一、不統一は純粹經驗の程度の差にすぎないとの理解
- 3 段階 自覚的な統一、主客のちがいを超越した知的直観（天才の神来、三昧）

【佐野先生より捕捉】

わたしたちが何かに没頭する集中状態は一時の情欲に従うようにも思える。しかし『善の研究』では第 3 編において、これをもっとも深いところからくる内面の要求に従う「至誠」＝「芸術、道徳、宗教の極致」として純粹經驗の一側面としている。そして 4 編においては有限性を覚知することを求めており、自己の根柢において神を見る「見神の事実」を重視している。

【哲学的問い】

神意とはなにか。神意が統一力なら、理不尽に人を殺害するようなことも神意か。それは理法に含まれるか。含まれるとしたら、それが善に向かうのは都合が良すぎないか。

【発言 1】

ここでの神の意志を行動の判断とはとらえないで、全体の意志、あるいは宇宙の意志ととらえるべきではないか。

※佐野先生より第 4 編第 3 章の 7 段落目に同様のことが書かれているとの補足があった。

●第二部 読書

第 1 編第 1 章の第 1 段落（以下 § 1-1-1）を再々度読む。ここで「經驗」が再々度問題になった。

【発言 1】 望遠鏡で見たものは純粹經驗たり得るか。間接經驗でしかないのか。

【発言 2】 夢中なら望遠鏡もふし穴もおなじではないか。

[発言 3] 推理、推論が入るかどうかで分かれるのではないか。

夢中で見入ってれば純粹経験であり、判断が働けば純粹経験をでる。

【§ 1-1-4 を読む】

§ 1-1-2 から § 1-1-3 を音読し、§ 1-1-4 に入った。§ 4-1-4 を参照しながら意識の分化発展に関して対話をする。統一に対する分化発展を、純粹経験の段階的な理解をも含めて考察。この日の出席者には、純粹経験の段階的な理解に対して否定的な意見が支配的であった。

[発言 1] 無ではない単なる混沌は想定しないのか。

[発言 2] 生きているかぎり何らかの統一があるのではないか。

[発言 3] 生かされている。

[発言 4] 分化発展は、単細胞が分化するなどの生物の発生を連想させる。

[発言 5] 統一が最終的で根本的であるなら、分化発展も統一から導きだされる必要はないか。

●哲学的問い

§ 4-1-4 にある「意識の分化発展は統一の他面であってやはり意識成立の要件である」は、分化と統一が同時に意識されないことを意味しているのか、分化と統一を同時に見る目を許容するのか。意識の統一をたもったまま分別することは否定されるのか。

(筆記：岡部)